岸辺露伴のヒーローアカデミア

飛燕 執筆中

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒロアカに岸辺露伴がいたらどうなるんだろう?･というところから始まりました。

処女作、初投稿なのでどうか暖かい目で見てください。

多分亀投稿になります。

見切り発車、口調不安定など不安要素もありますががんばります。

この露伴は４部の転生ではありません。

未熟者ですがよろしくお願いします。

目次

岸辺露伴は志望校を決める ―― 1
岸辺露伴は雄英入試を受ける　その1 ―― 4
岸辺露伴は雄英入試を受ける　その2 ―― 7
岸辺露伴は合格する ―― 13
岸辺露伴は入学する1 ―― 15

岸辺露伴は志望校を決める

ここはとある家の2階の一室。
緑を基調とした部屋の中、壁に向かって人が一人座っている。
彼の名前は岸辺露伴、中学3年生兼漫画家だ。
必死の形相で手を動かし続けている。
その手にはインクの染込んだペンが1本、一切迷う事無く漫画を描く。
ふと彼は描く手を止めため息を1つ、そして立ち上がってベランダに出た。
彼は今選択を迫られていた。
これまで約二年間、休む事無く毎週ネットに公開していた漫画が完結へと向かっていた。
初めて公開したときは中学1年生、気まぐれからだった。
だが彼の予想以上に反響が大きく、多数の人に読んでもらう快感を覚えてしまった。
ただ彼には、この作品は公開すれば読んでもらえるだろう、という自信もあった。
毎週一話公開すると決めてから、この快感と次は読んでくれないかも知れないという不安を繰り返しながらやってきた。
だが始まりがあれば終わりもあるというもの、その瞬間は近づいていた。
そろそろ終わるという旨を投稿したときにはそれを惜しむ声も多かったのだが、彼曰く、「作品にはリアリティが必要なのだよ。このまま続けるのはリアリティに欠けるからね。いくら言われてもここは譲れないな。」との事である。
ただ、問題はこれからどうするかにあるのだ。
同じ作品世界で主人公以外をメインとしてスピンオフを描くか、全く違う作品をさっさと描き始めるか、はたまた一旦ネタ探しをするために休むか。
そんな事を考えながら外を見ていた。

そしてその答えは突如として現れた、そう現れたのだ。
この個性という特殊能力が当たり前として存在しているこの社会で、その力を使って悪事に手を染めようとする輩がいる。
一般的にはヴィランなどと呼ばれているが、そいつが突然ここからは遠いが街中で個性を使って暴れ始めたのだ。
彼もそれを当たり前のように受け止め、所詮は巨大化みたいなありふれた個性だろう、などという程度しか考えなかった。
そして彼はある者に目をつけ、閃き、そして叫んだ。
「これだッ！ぼくは今最高のネタを掴んだぞッ！ヒーローだ、ありふれた存在でいながらもなぜ気がつかなかったんだッ！描きたいッ！描きたくてしょうがないッ！ここまで気分が高揚するのは久しぶりだッ！」
同じくその巨大化したヴィランに注目していたであろう通行人はぎょっとして彼を見るが、その事に本人は一切気付かない。
そしてダッシュで部屋の中に戻り、また席について描き始める。
先ほどまで描いていた作品を完結まで描ききるために。
余談だがその部屋からは不気味な笑い声とペンの音が一日中絶えなかったという。

描き終えてから1週間ほどたったある日。
しっかりと完結させ、次回作はヒーローをメインに置いたものを描きたいと公表した。
しかし、彼の手元には描きあがったページは一切無く、足元にはくしゃくしゃの紙くずが多数転がっていた。
描いても描いてもしっくりこないので悩んでいたのだ。
そして既にその理由は理解していた。
リアリティが足りないのだ、リアリティが。
彼は今までも漫画を描くためのリアリティを求めて色々な無茶をやってきた。
病院の世話になったのも1度や2度ではすまない。
そしてそれらの根源にある物はいつも変わりはしない、そしてそれ

は今回もだろう。
　彼はリアリティを求め、調べた結果とてつもなく、そしていつもどおりの判断を下した。
「決めたぞッ！ぼくは雄英高校に入るッ！そしてヒーローに向かって進む所をこの目で見るんだッ！」
　決めた当日のうちに家族に伝え、翌日には学校にすら伝えたそうだからこの行動力は驚きだ、漫画のため以外には向かないが。
　これから約半年、漫画を描くために勉強と個性ヘブンズ・ドアーの強化に努めることになるのであった。

岸辺露伴は雄英入試を受ける　その1

露伴が雄英高校に入るという決断を下してから約半年がたった。
まずは入ろうとしている雄英の受験がどのようなものか説明しなければならない。
この雄英高校にはヒーローになるために存在しているヒーロー科なるものがある。
そこに入るためには倍率３００倍、偏差値７９というとても狭き門を通らねばならない。
その試験形式は特殊で、筆記試験と実技演習試験の２つに分かれている。
筆記試験はそのまま学力を問うものだ、問題はその次の実技試験にあった。
ヒーロー科を受験する者のみが受けることになるこの試験、基本的なヒーローの素質を問うものである。
戦闘能力やヒーローとしての精神など試されるものは多岐に渡る。
ただ、露伴は戦闘に関しては十分戦える域にあるが、明確にヒーロー向きの性格では無かった。
そんなこと彼は一切気にせず勉強と訓練をしていたが。
訓練でやっていたことはいたって単純だ。
個性についてはもう十分だと彼が判断したため、基本的には勉強と体を動かすことを行なっていた。
特に体力はいつも机に向かって座っていたため、運動の習慣もなく少し走っただけでもバテるレベルだった。
それを変えるため努力した、結果として体は健康的な筋肉がつき、少しなら走り続けられるだけの体力を手に入れた。
依然として漫画は描いていたので、あくまで少しの差であり、そもそも個性のヘブンズ・ドアーは基本的に体力は必要としない。
そんな努力を行なって約半年、岸辺露伴は今雄英高校の前にいた。
いや、ただ歩いているだけなのだがとても目立っていた。
理由は簡単だ、彼は今制服ではないのだ。

少し読者向けの表現になってしまうが初登場時の服を思い出してほしい、あれを、いま、この場所で着ているのだ。
周りには中学校の制服を着ている生徒しかいない、そしてその全員が彼を避けて通っていく。
一切周りを気にする事無く受験会場に到着し、席につく。
そのまま特に何も無く時間は進み、試験時間になる。
特に問題も無く筆記試験は始まり、彼はスラスラと解いていく。
もともと頭の回転は速く、知識量も多いのだ、ほぼ全ての問題を書ききり回答を裏返して暇つぶしに落書きをする。
次第に落書きのほうに集中して試験は終了する。
結果として裏には立派な４コマ漫画が出来上がっていた。
この試験前の詰め込みの時期からずっと漫画を描いていなかったのでフラストレーションがたまっていたのだ。
因みにこの落書きは採点した教師陣では大好評だったらしい。
そんなこともあって次はとうとう実技試験だ。
試験前になって特徴的な服装をした男性が入ってきた。
露伴は、なんだこの男は?突然入ってきてライブのようなテンションで・・・もしかしたらこいつはこの雄英の教師なのか?となるともしかしたらこいつはヒーローなんじゃないか?早々に出会えるとは、だが!喜ぶのはまだ早い。ぼくが描きたいのは学生がヒーローに成長していく話であって出会えればそれで良い訳じゃないんだからな。何事も経験が作品にリアリティを生むんだ、絶対に入学しなくては、などと考えていた。
ルール自体はそこまで難しいものではなかったため、流し聞きでも十分理解できた。
だが問題はその後だった、その教師と思わしき男に質問を投げかけためがねをかけた男子生徒が一人いた。
その生徒は質問を終えた後ついでのように近場にいた他のモサモサ頭の男子生徒に対して注意をした。
モサモサ頭の生徒は萎縮していて謝るだけであった、が次に注意した相手が悪かった。

その生徒は「次にそこの男子生徒！君はなんて格好でこの雄英高校の受験に来ているんだ！まじめに受ける気がないなら即刻去りたまえ！」とあろうことか露伴に注意したのだ。

もちろん露伴は「格好だと？別に義務じゃあ無いんだし何を着ていたっていいだろう。第一それをきみに言われる理由がわからないな。君は教師じゃあないだろう？」と返した。

思いっきり喧嘩腰だった、もちろんいつもはこうじゃない。

ただ彼はやられたらやりかえすタイプなのだ。

ピリピリした空気、それを壊したのは前に立っていた教師だった。

明るい雰囲気で話しかけ、その男子生徒を座らせて何事もなかったかのように生徒たちに試験会場を割り振っていく。

教師陣はいきの良い生徒がいるな、程度にしか考えていなかった。

もともとヒーローは性格が特徴的なものが多いのだ。

因みにこのとき露伴は、その場を混乱させずに誘導するのもヒーローに必要な能力なのか・・・覚えておこう。などと場違いなことを考えていたが。

そして彼に割り振られたのは試験会場B、あのめがねをかけた生徒とモサモサ頭の生徒と同じ会場だったのだ。

岸辺露伴は雄英入試を受ける　その２

まずはこの実技試験について説明しなければならない。
この試験は校内にいくつもある演習場に生徒を割り振って戦わせるものである。
その会場は完全に市街地を再現していて、６、７階建てのビルやコンビニなどが配置されている。
対象は敵ロボット、１Ｐから３Ｐまで得点が振り分けられている。
さらに０Ｐのお邪魔ロボットが所狭しと暴れるギミックも存在している。
会場Ｂに割り振られた露伴、彼は今とても高揚していた。
他の生徒の興奮している理由は戦えるからだが、彼の理由はそうではない、この中にヒーローの卵がいるからだ。
なので一番前には陣取らずに後ろのほうで観察をしていた。
観察されている側はとても居心地が悪かったが。
そのような状況で突然「ハイ、スタートォ！」という叫び声が響く。
動揺が走る、冷静に判断して状況の整理は終わっているが露伴は動かない、観察対象が見えなくなるからだ。
一切動く気配のない生徒たちに対して、先生は追加で「どぉした！実戦にカウントなんざ無ぇんだよ！」と叫ぶ。
そこで気付き一気に走り始める生徒たち、そして取り残された生徒が２人。
少し出遅れて走るモサモサ頭の男子生徒、残っている露伴に疑問を持ちつつも走り始める。
全ての生徒が入ってから彼は焦らずに歩いていく。
一番戦火の激しい所より少し離れた交差点の中心にやってくる。
そこに「ヒョウテキハッケン！ブッコロス！」と音を出しながら突っ込んでくる１Ｐロボット。
露伴はそれを見て口を開く、「ぶっ殺すだと？やれるものならやってみろッ！ただただ戦えば良い訳じゃあ無いって所をみせてやる。」
近づいてく敵ロボットに対して露伴はポケットからペンを取り出

してロボットに向かって走っていく。
あと少しで触れられるという距離感のとき、露伴は叫んだ『ヘブンズ・ドアー』！と。
すると彼の姿がブレ、背後から人型が現れる、これが露伴の個性である。
ただ、彼の個性の特徴はもっと他にある。
それは・・・敵ロボットにヘブンズ・ドアーが触れた瞬間、その場所が本のように開いたのだ。
元々は人を本のようにして記憶を読み、空白に書き込むことで強制的にその状態にする、その行動を本人の意思とは無関係に行なわせることができる個性であった。
だが彼が個性に目覚めてからもう１０年はたっている、もう既に物にすら書き込むことが出来るほど成長していた。
ヘブンズ・ドアーの個性の影響下になったロボットは動作を停止する。
そしてペンを余白に向けて叫びながら書き込む、「『１０秒後に大きな音と火柱を立てて自爆するッ！』何かを狩るんだったらもっと効率的にしたほうがいいとオススメしておこう」と言って露伴は離れる。
きっかり１０秒後、轟音と共にその会場にあるビルなんかよりも高い火柱が上がる。
もちろん露伴は無意味にこんなことを行なった訳ではない、他のロボットをおびき寄せるためだ。
そのあとは単純な作業である、やってくる敵ロボットにさまざまな命令を書き込んでいくだけだ。
大体やったことは、敵ロボットを攻撃するように書き込んだり、会場内を他の受験生妨害のために爆走させたり、シンプルに本のページを破り取ることによって故障させたりなどもした。
なお爆走の指示を書き込んだ時点で露伴のポイントになっているために、他の生徒が物理的に壊してもその生徒の得点にはならない、ただの意地悪に近い。
別にポイントを稼ぐだけだったらもっと単調に壊すだけでも良

かった。
ここまで色々なことをやっているのにはもちろん理由がある、それは先生へ、自分の個性が多岐に渡っていて応用性が高いということをアピールするためである。
特に新たなロボットがおそってこない時間はただ近くの瓦礫に座っていた、他の生徒たちを助けたりなどは絶対にしない。
観察しているからなんて理由ではなく、ただそこらにいる有象無象には興味がないからだ。
得点を程よく集めて、露伴が飽きだした時、突如としてそれは現れた。
地響きとともに現れたそれ、キャタピラを使って足元の瓦礫など一切の障害物とせず、横にあるビルを鷲掴みにしてその巨大なロボットは突き進む。
露伴もこれには動揺し口を開く、「なんなんだこれはッ！まさかこつがＯＰのお邪魔ロボットかッ!?ヘブンズ・ドアーが直接こいつを攻撃することは難しいか？できる抵抗といえば瓦礫を飛ばす程度か・・・今はこいつから逃げたほうが良さそうだな・・・」
彼が撤退を始めようとした時、事態は一変した。
あのモサモサ頭の男子生徒がロボットの前に飛び出して、そのまま大空のロボットの頭目掛けて飛んだのだ。
その時、それを逃さずに見ていた露伴に電流がはしった。
その男子生徒が飛び出すとき、露伴の目は巨大ロボットの前で転んで逃げられない女子生徒を見つけた。
露伴にはこの状況があのヒーローものの漫画を描くと決めた時と重なって見えたのだ。
露伴は叫んだ、いや叫ばずにはいられなかった。
「これだよこれッ！ぼくが求めていたリアリティはこれだッ！彼と話してみたいッ！」
そう言って露伴は巨大ロボットに向かって走りだした。
彼が走りながら見た光景、それはあの男子生徒が巨大ロボットの頭を殴りぬくというものだった。

丁度その男子生徒が降りてきそうな場所に間に合った露伴、だが彼にはその状況が異常に見えていた。
どう見ても降りている、ではなく落ちているにしか見えないのだ。
そこにあの転んでいた女子生徒がやってきて露伴に話しかける。
「あ、あの！あのモサモサの髪の人！私を助けるたｍ」「そんなことは後だって良い！ふぅ、一旦落ち着こう。それよりもだ、もしかしてあいつ飛び出したは良いが着地のこと考えてなかったとかじゃないか？」
「多分・・・もしかしたら？」
「はぁ、正気なのかあいつは。まあ良い、君はあの落下をとめられるかい？」
「できる！・・・と思いたいけど・・・正直速すぎるかも知れないです」
「それなら十分だッ！ぼくが行って遅くしてくるから後はたのんだぞ。あいつには聞きたいことがあるんだ」
「でっでも！どうやって遅くするんですか？」
「そんなの簡単さ、ぼくが直接行けば良いんだ。」
そう言って落下地点を少し避けた場所に立ち、叫び、個性を使う。
「『ヘブンズ・ドアー』ッ！」すると露伴の太ももが本のように開いた。
そして続けてペンをだして書き込んだ。「『時速７０ｋｍ／ｈで上に吹っ飛ぶ』ッ！」
その瞬間露伴の体は一気に高度を上げ、大体男子生徒と同じくらいの高さになった。
突然真横に上がってきた彼にモサモサ頭の生徒は驚き話しかける。
「なっなんでこんな所に?!」
「それはぼくの個性だッ！それよりもだ、今から君をあの女子生徒に助けさせる。そのために早すぎるから僕の個性で速度を下げるッ！いいなッ！」
「えっ？どういうこ「『ヘブンズ・ドアー』ッ！『落下速度が０になる』ッ！」ちょっグッ！」
動揺していた男子生徒は空中で突如停止して、また落下をはじめる。

露伴はジワジワ落下するようヘブンズ・ドアーを使用する。
そのまま特に何も無く着地する露伴、今は落下に対して興味が出ることは無かった。
変わりに今背後であの女子生徒の個性のおかげでで無事に落下できたあのモサモサ頭の男子生徒に興味が沸いていた。
怒涛の勢いが一旦落ち着き冷静になれた２人、だが次の怒涛の勢いがやってきた、そう露伴だ。
落ち着いたモサモサ頭の男子生徒に紙とペンを取り出して駆け寄り、まくしたてる。
いくら質問しても答えてくれない男子生徒に痺れを切らした露伴は肩をつかんで更に質問する。
少し考えればすぐにわかるのだが、その男子生徒の手足はぐにゃぐにゃになっている。
個性の反動で骨が砕けてしまっているからだ。
だがそんなこと気にもせずに質問を続ける露伴に対して、女子生徒は制止をするが彼は一切聞いていない。
そんな時、試験終了の声がかかる。
その男子生徒は絶望した顔で気力を失い倒れる。
近くで見ていた女子生徒はその男子生徒が「せめてワンポイントでも・・・」とつぶやいていたのが聞こえていた、そう彼はこの時まだ０ポイントだったのだ。
もちろん露伴もそれを聞いていた、だが彼はその男子生徒に「また今度話そう。次はきっと雄英で会えるだろう」と言い残して男子生徒を解放して離れる。
露伴にはこの男子生徒が雄英に入るという絶対の自信があった、得点は０Ｐなのにだ。
その予想の通り露伴とその男子生徒は合格する、漫画のネタへの勘は鋭いのだ。
因みに近くにいた女子生徒もだが、露伴は一切気にしていなかった。
試験終了後、その男子生徒が治療されるが、その時既に露伴はそこ

にいなかった。
漫画のネタを掴んだ露伴はその勢いのまま家に帰っていた、先生側は特に気にしていなかった。
その会場で生徒たちに最も強い印象を与えたのは、巨大ロボットを倒した生徒ではなく岸辺露伴だった。

岸辺露伴は合格する

岸辺露伴の元に郵便が届いた。
雄英の判子のあるこれを露伴は瞬時に合格通知であると確信した。
部屋に戻って封を開ける、すると出てきたのは何枚かの書類と何かの機械が一つ。
書類はとりあえず置いておいて機械を手に取ってみる。
「なんだこの機械は・・・ボタンが付いているのか、とりあえず押してみよう。」
興味本位で押されるボタン、するとなにやら光が出てきた。
露伴は即座にこれを投影機であることを理解し机に置く。
するとその投影機から突然筋骨隆々な男が現れ、叫びだす。
「私が投影された！」
「なんだとッ！なぜオールマイトが雄英から送られて来たものに映っているんだッ！」
反射的に机に身を乗り出し露伴も叫ぶ、そしてその後考察をし始める。
（いや待てよ、このごろの活動はここらの地域に集中している。もしや先生として雄英に来たのではないか？そうならばッ！ナンバー1ヒーローに取材できるッ！これは良い体験になるぞッ！）
この思考を終えると、投影機から音声が流れる。
「どーも岸辺露伴君、君ならもう理解しているかもしれないけど、今年から雄英に勤めることになったんだ。そこでこの映像で合否を伝える事になったんだ。志望理由が漫画のリアリティのためって書いてるのは素直で私は好きだな！」
ここまで聞いてから露伴は口を開く。
「あいにく嘘ってのは嫌いなんでね。そんな事してる暇があったら漫画のためになりそうなものを探してるさ。」
「まあ後がつかえてるんで早速本題に入るとしよう。筆記試験は合格点を余裕で超えてるよ。実技試験は・・・６６ポイント！ただ今回の実技試験で見ていたのはヴィランポイントのみにあらず！ヒーロー

に必要なのは人助けの精神！レスキューポイントってのを導入してね。審査制なんだ。君のレスキューポイントは最後の動きを評価して１９ポイント、合計８５ポイント！合格だ！しかも1位でね。もし最後のが無ければここ０点だったかも知れないから気をつけてよ？ここで本来は来いよ！ここが君のヒーローアカデミアだ！って言うんだけどね？君の場合は・・・そうだなぁ・・・よし！来いよ、絶対に飽きないような高校生活を保障しよう。この３年間全力で雄英は試練を与える。周りをよく観察するといい、それもまた学びの１つなんだから。」

「ああ、当然だッ！それを期待してるんだからなッ！やっとだ、やっとスタート地点に立てたッ！これで漫画が描けるぞッ！」

露伴は宣言通り雄英に入学することに成功する。

前まで漫画をあげていた場にて雄英高校に入学することが決定したことを発表したときは相当大騒ぎになった。

即座にネットニュースなどにも乗っていた。

当然新規入学者たちの目にも触れることとなるのであった。

岸辺露伴は入学する1

岸辺露伴は今雄英高校の校内にいる。
学校内の様々な場所に顔を出して、まるで迷子かのように周りを観察している。
だが確実に迷子では無い、何故なら先程3年生の先輩にスタンドを使ってここの地図を確認したからだ。（3年生であることもその時知った）
因みにだがなぜか学校内で3年生にもなって迷子になったやつがいたらしい、もちろん露伴は一切気にしていない。
露伴は知ったからといって満足するタイプではない。
リアリティは自分が体験してこそ得られるもの、その考えが故に朝早くから学校に来て早々にスタンドを使って探索をしている。
ただ、雄英高校は広すぎるため1日では回れない。
露伴は歩きながら毎日探索をする事を決める。
因みに今の格好だが、スケッチブックを持っており、制服は一応着てはいるがあの髪どめ?は付け続けている。
これから数ヶ月程色々な場所に出没する変人の噂が立つことになるのだが、露伴は一切気にせず取材を続けるのであった。

そんな朝の出来事もありつつ、ここは1年A組の教室前。
露伴は迷う事無く朝礼の２０分前にはしっかりと着いていた。
それどころかさらに数分前に着いており、身長の2倍はあるような巨大な教室の扉に興味を持った露伴はそれをスケッチしていた。
一応書いておくと、A組の人数は２１人であり、今教室内にいるのは１０人ほどである。
勿論この時間は登校ラッシュの時間にあたるわけでその人数しか来てない訳ではない。
露伴のうしろに5人ほどが待ち惚けを食らっているのである。
彼らも露伴に話しかけたのだが、露伴は一切気が付かなかった。
一切気が付くこともなく取材を続ける露伴を彼らは即座に変人で

あると理解した。
　この状況が動いたのはそれからすぐである、新しく来た1人が露伴の肩に掴みかかったのだ。
「てめぇ邪魔だ！どけやモブが！」
「はぁ・・・　誰だい君は？取材の邪魔なんだが」
「ああん？てめぇこそ誰だよ！取材とかなんとか訳分かんねぇこと言ってんじゃねぇぞ！」
「訳わかんない・・・だって？そうだろうなぁ！君みたいな低俗な頭じゃ理解なんて到底不可能だろうなぁ？そうだな、質問には答えておこう。僕は漫画家だ」
　この時点で露伴は不機嫌であった。
　自分の取材を邪魔されて苛立ったからだ、ただこの後こいつを煽った方が面白いんじゃないかと思い付いた。
　因みに他の人はもう横から扉を開けて教室に入っていた。
「漫画家だと？ああアレか、そういやネットに書いてあったな、あのクソ漫画を描いたやつが入るってなぁ！」
「クソ漫画か・・・ふはははは！いいねぇその酷評！やっぱりそういうのもなきゃ漫画ってのは成り立たないよなぁ！そうだな・・・じゃあそのクソ漫画に君を出してあげるよ。勿論主人公としてじゃなくてかませ犬としてだけどね」
「かませ犬だと?!俺はここを主席で卒業してエリートコースを歩むんだよ！」
「エリートコースだって？君の性格で人気を出すのは無理だろう。やっぱりかませ犬としての才能に気付いた方がいいと思うな」
「んだとてめぇ！」
　このまま火花飛び散る口げんかは緑谷が来て爆豪がそちらにつっかかるまで続いた。
　実際は露伴も突っかかるつもりでいたのだが、やめておいた。
　緑谷の話なら後でいくらでも聞けると思ったからだ。
　露伴は初日から爆豪という面白いものが見れたと楽しんでいた。
　因みにだが露伴は後に本当に爆豪を漫画の中に登場させた。

一切名前も変えずに、勿論かませ犬としてだったが。

露伴が席に着きまわりを観察し始めた時だった、教室の入り口に寝袋を着て寝そべる不審な男がいることに気付いた。

露伴は何かアクションを起こすこと無くおとなしく見ていると、その男は担任の相澤だと名乗った。

そのあとその着ていた寝袋の中から生徒２１人全員分の体操服を取り出しつつ、それを着てグラウンドに出るようにとの指示を受ける。

何を狙っているのかは説明不足過ぎて露伴には理解できなかったが、面白いものが見れるという確信を持っていた。

誰も特に反発する事もなく全員が着替えてグラウンドに出た。

集合してからその先生から告げられた言葉は、「個性把握テスト」であった。

他の生徒がガイダンスなどが無いのかという当たり前の疑問を問うと（露伴は一応そこに疑問を覚えてはいたが、大した問題とは捉えていなかった）、先生は「ヒーローにそんな悠長な時間はない。自由が校風のこの学校、先生側もまた然り。」と述べた。

露伴の興味はもうそこには無かった。

個性把握テストという単語に対して、漫画のネタになりそうだという考えがあったからだ。

先生は告げる、個性使用ありの体力テストをすると。

露伴はスケッチブック片手に興奮していた、どんな人物がここにいるのか簡単にわかるものを雄英が用意してくれていたからだ。

岸辺露伴は自分の漫画家としての血が騒ぐのを感じながらこの試練を楽しむのであった。